

昭和45年に大多喜町森宮で発見された 2点の石器について

土屋 治 雄

はじめに

今回紹介する資料は、夷隅郡大多喜町猿稻在住の宮崎寿子さんが昭和45年に発見した旧石器時代の遺物と思われる2点の石器である。

大多喜町内及び夷隅郡内において、旧石器時代の遺物の発見例は非常に少なく、本誌上をお借りして紹介したい。

1. 出土地及び周辺の遺跡

出土地は、夷隅郡大多喜町森宮で、大多喜町の東部に位置し標高は約35mである。夷隅川中流右岸に位置し、流入する小河川によって複雑に削られており、枝分かれした小さな谷が台地に入りこんでいる。出土地は、北向きの台地の先端西側である。西側の谷や北側の低地には、水田が営まれており谷奥には堰が設けられている。夷隅川までは、直線距離で400m弱である。

千葉県埋蔵文化財分布地図(4)によると出土地周辺には10数ヵ所の遺跡が確認されている。

主な遺跡をあげてみると、

- ①縄文時代から古墳時代の遺跡である市場台遺跡
- ②出土地から北2.2kmにある台古墳群では、前方後円墳1基、円墳11基が確認されており、その内の1基からは、辛亥銘鉄剣を出土した埼玉稻荷山古墳出土の鏡と同じ鑄型で造られた鏡で、全国で5面発見されている内の一面である画文帯環状乳神獣鏡（半円方格帯神獣鏡）が、昭和13年に出土している。
- ③円墳20基を持つ髙谷古墳群
- ④前方後円墳1基、円墳2基、横穴古墳27基からなる愛宕山古墳、横穴群
- ⑤縄文時代から奈良時代の遺跡である横山白山台遺跡
- ⑥円墳8基を持つ縄文時代から古墳時代の遺跡である横山内岡台遺跡
- ⑦西方1.6kmには、県立総南博物館のある中近世の大多喜城跡

⑧西方300mには昭和43年に須和田式土器3個体を出土している縄文時代中期から古墳時代の遺跡である船子遺跡

⑨旧石器時代の尖頭器やナイフ形石器を出土しており、旧石器時代から中世の遺跡である台遺跡などがある。

2. 石器発見の経緯と出土状況

2点の石器は、昭和45年の大多喜水害の際決壊した堰の土堤の修復工事中に発見された。

修復工事は、決壊地点の東側に隣接している台地の一部を掘削し、堰の土堤を修復するという形で行われた。

当該地の地主であった宮崎さんは、以前から相沢忠洋氏の本などを読んで、考古学に興味を抱いており、工事現場に行き、掘削された壁面を丹念に観察し、壁面に突き刺さっていた石器を発見した。

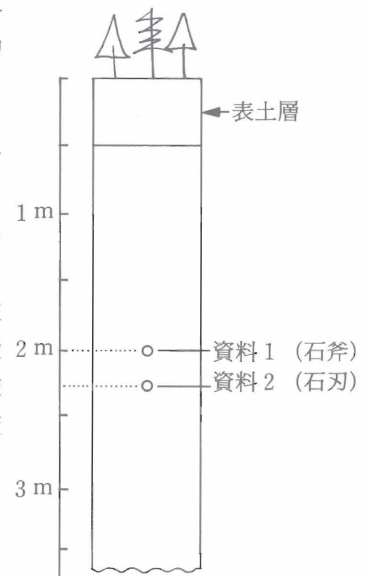
2点は、同じ場所で同時に発見された。

2点の位置関係は、資料1が、表土上端部から約2m位下の層、資料2は、その位置から約30cm位下の層で発見したとのことである。

その時のことを、宮崎さんは「古代人であったような気がした。」と語っている。

出土地周辺は、現在草に覆われており、壁面も崩落が激しく正確に観察することは大変難しい状況である。

しかし、崩落している土や、堆積している土は、関東ローム層に極めて近い黄褐色の土



出土状況略図



第1図 遺物出土地点と周辺の遺跡 (1/25,000「大多喜」「国吉」)

であり、比較的厚く（約3.5m位）堆積している。

しかし、その土は、下総台地におけるローム層と非常に相違っていて、ローム層とおぼしき土の中に3～5cm大の泥岩ブロックが全体的、かつ比較的均一に、混じっている。

3. 夷隅郡内のローム層堆積状況

大多喜町の属する夷隅郡内で、先土器時代の石器を出土している大原町安養山（寺谷）遺跡の土層の様子が大原町史の第一節『土器以前の文化』の中に記載されている。現地土層と非常によく似た状況なので以下引用してみる。

「この発掘によって確認された基本的な土層の様子は、上から下へと次のようであった（図1）。

I層・耕作土、

II層・黒色土で、炭化粒や焼土粒を含み、粘性は強いが、締まりは弱い、

III層・ローム漸移層で、明褐色を呈し、粘性や締まりはII層よりも強い、

IV層・ソフトローム層で赤褐色を呈し、粘性やしまりはIII層よりも強く、径一センチ大の泥岩粒を若干含んでいる。

V層・ハードローム層で、IVよりも明調の赤褐色で粘性や締まりは更に強く、径十センチ大の泥岩粒を含む。

VI層・ハードローム層で、V層よりも一層明調で、粘性や締まりは強く、より大型の泥

岩粒を含む、

VII層・泥岩風化層で、黄褐色を呈し、径一～五センチ大の泥岩ブロックを含む、

VIII層・泥岩風化層で、黄褐色を呈し、径五～十センチ大の泥岩ブロックを含み、以下基盤の泥岩層へと移行する。

以上のIII～IV層は、降下火山灰に起源する土層であるが、それだけでなく、基盤の泥岩の風化物と混じったものである。旧石器時代の石器群は、IV層中から発見された。」と記載されている。

出土地の土層は、この記述の中では、V層～VIII層の部分の土層に近いと思われる。しかし、これは現地を正確に調査したものではないので、今後の調査において明らかになることを期待したい。

これに関連して、大多喜町内の切り通しにおける土層の堆積状況を紹介してみようと思う。

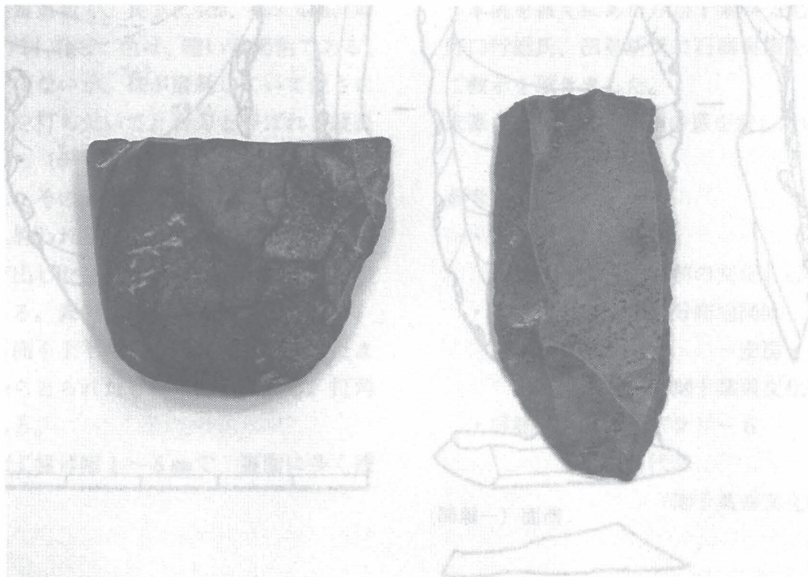
大多喜町内では台地における土層堆積状況は大きく三つ位に分けられる傾向がある。

その特徴は、

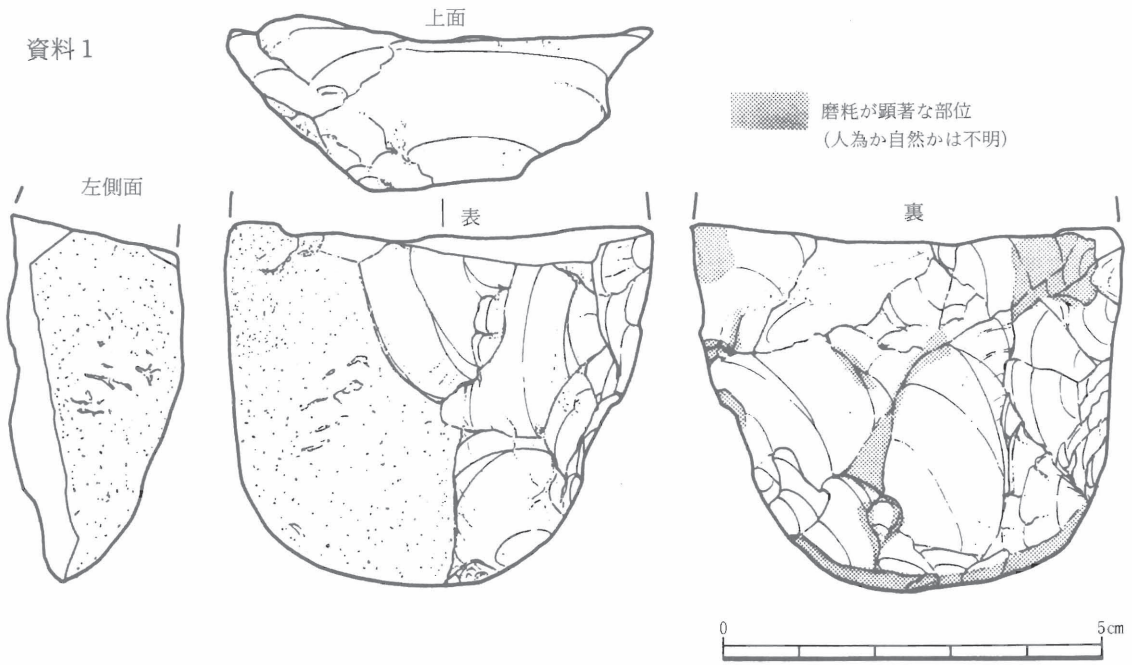
①表土及びローム層が非常に薄く（1m位）すぐ基盤の硬い泥岩層に達してしまう土層、

②表土及びその下のローム層が比較的厚く（推定4～5m）、ローム層とおぼしき土層の中に比較的小さい泥岩（径1～10cm）が全体的かつ均一に混入している土層、

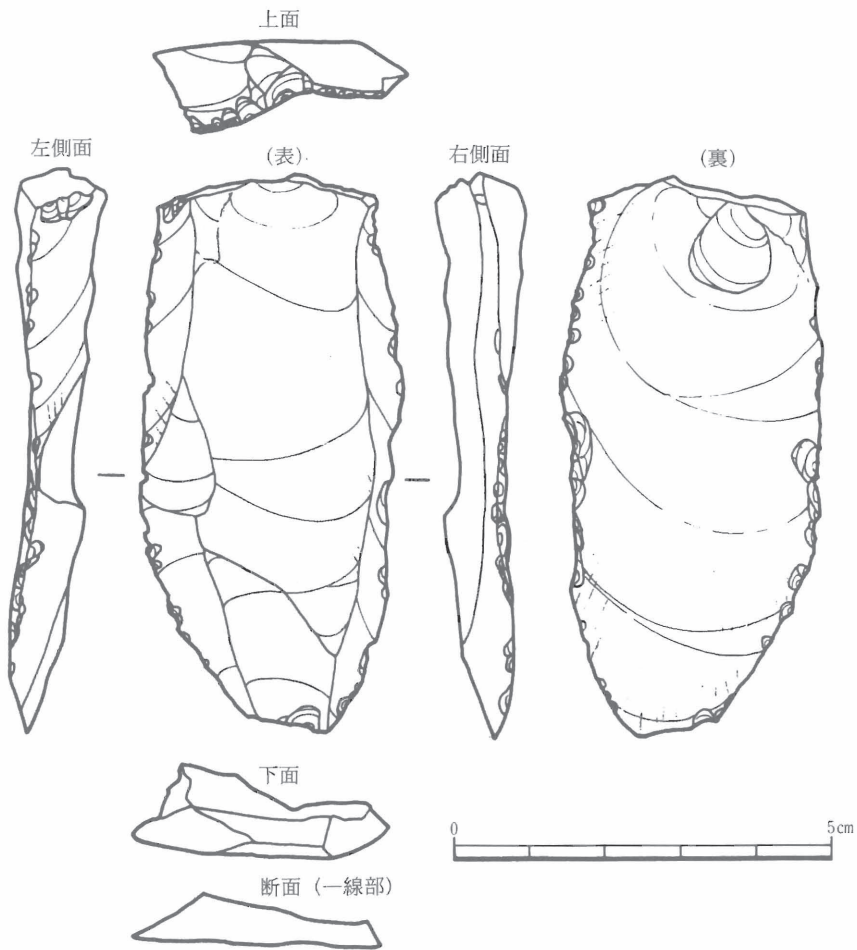
③表土及びその下のローム層が②と同じように厚く、ローム層とおぼしき土層の中に非常に大型の



資料1



資料2



泥岩（径40～50cm）が全体的かつ均一に混入している土層である。

遺物の発見された土層は②に分類した土層である。

これらの堆積状況は、夷隅郡内でも比較的広く見られる。

4. 資料について

資料1について

石材は、玄武岩^{げんぶがん}か、玄武岩質凝灰岩^{げんぶがんしつぎょうかいがん}と思われる。長さ4.8cm、幅5.6cm、厚さ2.3cm、重さ78.0gあり、色は暗い緑色をしている。

全体に磨耗が進んでいるせいで、つるつるしている。（原因は不明）

上部（あるいは下部か）が欠損していると思われるが、その断面もつるつるしていて平坦である。

表側右半部に、石を打ち欠いたときにできる痕跡（剝離^{はくり}）が多く見られるのに対し、左半部には全く見られず原石面を残している。

裏側は、形を整えるためと思われる調整の剝離^{はくり}の痕跡が多く見られる。しかし、凹凸はあるものの全体としては平坦でつるつるしている。

出土状況からは「旧石器時代の石斧」と思われるが、縄文時代の石斧という可能性も考えられないわけではなく今後他の類例を比較検討^{せきさく}していきたいと考えている。

資料2について

石材は、珪質頁岩^{けいしつげつがん}で、長さ7.4cm、幅3.4cm、厚さ1.2cm、重さ24.1gで、色は、暗い黄褐色である。資料1ほどではないが、稜^{りょう}が磨耗^{りよう}していて鋭さに欠ける。原石を打ち欠いて、石刃^{せきじん}と呼ばれる縦長の整ったかけら（剝片^{はくぺん}）をいくつもとった内の一つと考えられ、その時に、打ち欠く面（打面^{だめん}）を平らにしたと思われる打面調整や打面にできたひきし状にとび出した部分をとるための頭部調整の痕跡が見られる。表側に残る剝離痕^{はくりこん}からすると、この石刃^{せきじん}は打面を上下に持つ（両設打面^{りょうせつ}）かたまり（石核^{せきかく}）からとられたものと考えられる。打角は、88度である。

周辺部の加工痕は幅1～8mmで、裏面に多く残されている。

表側の面では、右左とも下部に多い。

裏側の右側縁では、中部から下部にかけて幅3～5mmの加工痕が多く下部に行くに従い幅が小さくなる。

左側縁では、上から中部に多く、上部は2mm、中部は4～5mmの加工痕が見られる。刃角は40度である。「二次加工のある石刃」である。

おわりに

聞き書きと若干の現地調査によるものであり、自ずと限界を持つものであることは承知の上で、発掘調査例の少ない南房総地方の旧石器時子の様相を明らかにする上で役立つことがあればと浅学の恥を省みず紹介した次第である。

最後に、宮崎さんに対し石器を貸していただいたお礼を申し述べると共に、20数年の長きにわたり石器を保管してきたことに、改めて敬意を表するものである。

宮崎さんが石器を保管されていたことで、大多喜町に旧石器時代から人類が生活を始めていたことが今まで以上に明らかになった。感動を覚えずにはいられない。今後の発掘調査により、更に資料が増加し、先人の歴史が明らかになることを願ってやまない。

又、本稿に直接の関係はないが、宮崎さんは、70歳にして、現在法政大学通信課程に学ぶ現役の学生であることも紙面を借りて紹介しておきたいと思う。

本稿を書くにあたり当千葉県文化財センターの野口行雄氏、田島新氏に石器実測をはじめ貴重なご教示を頂きました。

末筆ながら記して感謝の意を表したいと思います。

(1995.3.6)

参考文献

- ・大原町史
第一節『土器以前の文化』（加藤晋平著）
- ・千葉県埋蔵文化財分布地図(4)
—安房・夷隅地区—
(財千葉県文化財センター)
- ・房総考古学ライブラリー6
古墳時代(2)
(財千葉県文化財センター)